

Sumet Jumsai: *NAGA—Cultural Origins in Siam and the West Pacific—*

1988 Oxford University Press(190×250mm, 216pp. 5tables 183figs. 20col. illus. )37\$

浜 田 哲 也

東南アジアに於いては大陸部、島嶼部を問わず、ナガ（龍）のモチーフが神話や儀礼、そして建築や美術などに広く用いられて来た。今、手近にある事典を引いて見るとそこには次のようにナガについての簡略な説明が施されている。「インド神話における大蛇、ないし龍。東南アジアでは、様々な土着の神話とも結びついて、宇宙の最下層をなす冥界、水界、地下界を代表する。バリの神話では11層からなる宇宙が亀の上に乗り、この亀をナガが取り巻いている。北タイでは、ナガは土地霊であり、家屋の支柱はナガの頭の上に立つと考えられている。その神話的性格は両義的なもので、善にも悪にも通じ、始源の混沌や暗黒を表すこともある。さらに各地の神話や美術の中に、天界、生命、正義、秩序などを表す霊鳥ガルーダ、あるいはサイチョウ（犀鳥）と対をなして表れ、宇宙論的対立を象徴する。」(1)

例えばアジア諸民族の建国神話の観点から見ると類型的には南方型の龍祖神話、北方型の鳥獣祖神話そして中間型というように分けることが出来るがビルマ、タイ、ラオス、ベトナムなどでは第一の龍祖神話のタイプが広く流布している。(2)

今回、書評で取り上げた Sumet Jumsai のこの本は上に記したナガのモチーフが特に建築や儀礼の上でタイ及び西太平洋でどのように用いられているかを豊富な写真や図表を用いて解明しようとするものである。本書は1982年にタイ語で書かれた *Nam(water)—Origins of Thai Culture—* の内容を更に拡充し、特にタイ語の本ではあまり触れられていなかった西太平洋についての材料をも取り入れ

ているがやはり取り上げられた例の多くは著者の国タイについてのものである。

著者は1939年にバンコクで生まれ、1967年にケンブリッジで建築学の博士号を取得した建築家であり、其の意味では民族学あるいは人類学の専門家ではない。しかしながら巻末のビブリオに載っているように古都アヌタヤの設計、あるいは山と水のモチーフについての研究などを通じて Naga の問題を特に文化的観点から考えるようになったものと思われる。著者自身が冒頭で断っているように本書の構想には故 R. Buckminster Fuller 教授の力が大きく、従って表題の下には With contributions by R. Buckminster Fuller と書かれている。

以下、1、問題意識ないし問い 2、方法（分析概念、アプローチの仕方、理論）3、扱われている素材（一次資料、二次資料）4、構成 5、文章 という五つの側面に分かれて本書を見て行くことにしよう。

先ず最初に、著者が本書を執筆するに際しての問題意識であるがナガという極めて重要なシンボルがタイを始めとする東南アジアそして西太平洋において広く分布しているのはどのような背景があるのかという歴史的な関心ないし志向があげられる。そのことは序章において述べられているが歴史といっても著者のそれはかなりタイム・スパンが長い。東南アジアの大陸部と島嶼部がまだ陸続きであった氷河時代以降、人間がどのようにして移動したか、またそれに伴って文化要素がどのように伝播したのか、氷河時代が終わり海面が高くなるにつれて海上交通が重要になるがその際、海運技術と文化伝播といった関心

が著者の基本にある。このことは次に見る方法論の問題に係わって来るが要するに著者は強いて言えば歴史民族学ないし人類学の中でも文化伝播論的な関心から出発していると言えよう。副題が端的に示すように著者の基本的な関心はナガというシンボルの起源をさぐるところにある。

先に著者はプロの建築家であると言ったが本のカバーの著者紹介によれば実際に国際コンクールなどに参加しているらしい。しかしながら後で素材のところでも触れることになるが本書で用いられている豊富な建築史上のデータ、例えばアヌタヤを始めとする都市のプランや寺院の設計図などを見るともともと建築史の出ではないかと思われる節もあり、このことが著者の基本的な関心を規定しているのではないかと考えられる。

二番目の方法論の問題に移るが既に指摘したように文化伝播論ないし文明史という歴史的なアプローチが基本になっている。しかしながら巻末の簡単なビブリオにはいわゆる基本的とされる東南アジア史学また歴史民族学の文献は殆ど挙げられておらずまた引用もない。何よりも評者が不満に思うのは著者に文化の担い手としての民族の概念が全くといっていいほど欠落していることである。著者自身は歴史的後付けのためにいろいろな地域の例を持ち出して来るのだが先行する歴史民族学の諸業績を無視しているためにそれらのつながりが必ずしも明確になっていない。このことは本書の最大の欠陥の一つである。

民博において「東南アジア・オセアニアにおける文化クラスター・文化項目の相関性」をめぐる共同研究が行われその結果はコンピュータを用いて分析され発表されることになっているが、このような研究で使われている厳密な方法論（相関係数の考え方を始めとする）がないために、また三番目で触れるように、使われている素材が恣意的で捨捨選択の基準が明確でないために論旨が首尾一貫しておらず、そのことが平板な記述という印象を与えている。

なおキーワードとなる基本的な（分析）概

念としては水、川、文明、儀礼、交通、建築、シンボルなどが挙げられる。

三番目に、使われている資料・素材の問題に移ろう。最初の所で触れたように副題では西太平洋も扱われることになっているがしかし主として取り上げられているのは著者の母国タイである。内容的には圧倒的に建築そして都市の設計図が多い。それらはすべて図表あるいは写真の形で提供されている。具体的には五つの表、183枚の写真そして20枚のカラーの図であり、実は本書の最大のメリットは著者にはあるいは失礼かもしれないがこれらの一次資料にある。

例えばタイの宮廷儀礼の研究としてはWales, H. G. Q. のあまりにも有名な *Siamese State Ceremonies* があるが、本書32頁の1873年のラーマ5世の戴冠式の写真やまた80頁の王室船の写真などはWalesのものには載っていないかまたはあっても不鮮明であり、評者には大いに興味を誘われるものであった。使われているものの中にはバンコクの国立博物館の資料も多く、いずれも貴重なものである。

文献の資料としてはタイ語の王室年代記なども使われていて其の点では外国人の研究者には参考になる点もある。しかしながら二番目で指摘したように明確な方法論がないために資料がなぜ選ばれたのか、その資料自体の歴史的な位置づけということが明らかになっていない。著者の興味を引くものが、深い意味もなく集められて来たのではないかという印象が拭えないのである。

四番目に全体の構成は序章、第一章 ナガと儀礼、第二章 水に基礎を置く文明、第三章 水陸両生の建築、第四章 土地に基礎を置く建築、第五章 水の都市の6章から成り立っている。二番目の方法論のところでは批判したことと密接に係わって来るが、明確な方法論がないために、各章間の関係が一体どうなっているのか明らかではない。その当然の帰結として最後のエピローグでもなんら結論らしいものは提示されていない。評者自身の個人的関心としては第一章の中でも王子の沐

浴儀礼の記述などはそれなりに面白かった。しかし、問題はそういった資料がなぜ、またどのようにナガの問題と結び付いて来るのか、特にその歴史的な関係はどうなのかということであり、それが著者によって明確にされなければ意味がないのである。

最後に文章の点では平明な英語であり、(文章だけは)極めて分かりやすい。

以上をまとめていうならば最初の所で文明的に大きな問題提起がなされてびっくりするが、しかし本書全体としては、明確な問いと方法論によって首尾一貫した分析と結論が記述されたものではないといえる。通時的な観点からの記述でもなくかといって、Tambiahの研究のように共時的な観点からの宗教構造、そこにおけるナガの位置につ

いての記述がなされているわけでもない。(3)

しかし読み物としては豊富な写真が使われていて見て楽しいだけでなく、それらの中には他では見られない貴重なものが含まれていてそれなりに役に立つ。それらの写真を眺めながら自分なりに想像力を働かせ、タイやビルマの宗教構造の問題などを考えるよすがとなればしめたものであろう。

(注)

- (1) 「東南アジアを知る事典」 p. 205
- (2) 例えば宮崎市定「アジア史概説」 pp. 38-47 参照。
- (3) S. J. Tambiah: *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand* 1970 pp. 169-175, 295-304などを参照。